いついかなる場合でも「水を差す自由」を確保せよ

日本人は「竹槍戦術」の兇戯に等しい「事実」の背後に、不屈の精神という「真実」を見出していたというそこには、しかし、詐術にも等しい錯覚があったと思われる。なるほど「竹槍戦術」には、武器はなくても戦うという不屈の精神がこめられていたかもしれないが、不屈の精神をあらわすには別に「竹槍戦術」でなくともよかった。不屈の精神を際立たせようとするなら、むしろ「竹槍戦術」のような、敵に通じるはずもない田吾作的な振る舞いなどではなく、戦争に敗北したことを嘔みしめながら、本土上陸してくる敵にむかって精神を武装解除せず、真正面から向き合っていけばよかった。「竹槍戦術」には本当は不屈の精神などこめられていなかった。敵が上陸してくる恐怖に駆られて、慌てふためいているだけのことであった。そんな《「竹槍で醸成された空気」に「それはB29にとどかない」という「事実」を口に》することによって、水を差し、敵の上陸を前にしてしなければならぬことは、竹槍を振りまわすことなどではないことを覚らせる必要があったのだ。

考えてみれば、戦う武器がなくなったからといって、竹槍を振りまわしてみせようとする幼稚さこそが、そしてその幼稚さに結集させてしまうような空気が醸成されることこそが、日本の敗北を決定づけたといわざるをえない。「竹槍戦術」に不屈の精神など一切こめられていなかったことは、実際に上陸した敵になびかないどころか、逆にすり寄り、へつらい、卑屈に追従する光景が日常的にみられたことから明らかであった。「竹槍戦術」は不屈の精神とは逆に、むしろ「精神の武装解除」を浮き彫りにしていたのだ。戦争に敗北した「事実」から目を背けようとするドタバタにしかすぎなかった。その滑稽なドタバタ振りとは、敗戦直後の日本人の手の平を返したような豹変振りとは、表裏一体であった。

《そのため、われわれは今でも「水を差す自由」を確保しておかないと大変なことになる、という意識をもっており、この意識は組織内でも組織外でも働き、同時にこの自由さえ確保しておけば大丈夫という意識も生んだ。だがしかし、この「水」とはいわば「現実」であり、現実とはわれわれが生きている「通常性」であり、この通常性がまた、「空気」醸成の基であることを忘れていたわけである。そして日本の通常性とは、実は、個人の自由という概念を許さない「父と子の隠し合い」の世界であり、従ってそれは集団内の情況倫理による私的信義絶対の世界になって行くわけである。そしてこの情況倫理とは実は「空気」を生み出す温床であることはすでにのべた。そしてその基本にあるものは、自ら「状況を創設しうる」創造者、すなわち現人神としての「無謬人」か「無謬人集団」なのである。》

虚構の「空気」が内に膨らんでいくなかに、外の「現実」の空気を取り入れていくことが「水を差す」ことであり、しかし、その「現実」の空気もまた虚構である以上、それにも「水を差す」ことを忘れてはならないことが語られている。空気が加熱して「空気支配」が濃厚になってきたときには、水を差して冷却しなければならず、「水を差す」ことによってまた空気が醸成され、「空気支配」をかたちづくっていくなら、更に「水を差す」ことを怠ってはならないということだ。しかし、いまの日本の社会で、《「いつでも水が差せる自由」を行使しうる「空気」を醸成する》ようなことなど到底考えられないから、《「水を差す自由」を確保》するだけにとどまらず、竹槍では「B29にとどかない」とか、「先立つものがネエなあ」とか、水を差せば過熱した「空気」が《一瞬で雲散霧消してしま》い、全員が我に返ってもう一度最初に戻って考え直していくようになることが肝要であろう。

なぜなら、「水を差す」ことは確かに禁止されているわけではないから、「水を差す自由」は確保されているようにみえるけれども、水を差した者に対する周囲の憎悪や冷淡さは激しく、しかも水を差したことが全く考慮されずに一蹴されてしまうのが、戦前から打ち続く日本の戦後の現実なのである。したがって、いまだに日本には「水を差す自由」は生みだされていないといわねばならない。《「空気」も「水」も、情況論理と情況倫理の日本的世界で生れてきたわれわれの精神生活の「糧」と言えるのである。空気と水、これは実にすばらしい表現と言わねばならない。というのは、空気と水なしに人間が生活できないように「空気」と「水」なしには、われわれの精神は生きて行くことができないからである》と締め括られるには、あまりにも日本人は「水」不足で生きてきているのではないか。

山本七平は『日本的根本主義について』の冒頭で、戦後のフィリピン収容所で「アタマの切替え」という言葉が流行ったことを紹介し、この《面白い言葉》について言及している。

《これは簡単にいえば、状況が変化したのだから、その変化に即応し、その状況に適合するように思考・行動・所作等の一切合財を改めよということ、状況に対応し、新しい対象を臨在感で把握して回心コンバージョンをせよということである。将官は収容所が別だったから不明の点が多いが、佐官クラスともなると、大佐も少佐も同一収容所である。幹候少尉などは、はじめから軍人を演じさせられていた学生が多いから問題ないにしても、その生涯が軍人そのもので他の生活を知らない佐官クラスともなると、簡単には「頭の切替え」はできないと思うのが常識である。だが不思議なほどこれが簡単にできた。昨日までの連隊長は、役目が終わって舞台から降りた役者のように物わかりのよい好々爺となり、にこにこと人びとに対応してくれるのである。従って、尉官クラスや幹部候補生は、当然のように、すぐさま普通の市民にもどってしまうわけである。時には例外的にそうなれない人間もいたが、そういう人が受けたのは「アタマの切替えのできてないヤツ」といった嘲笑と蔑視で、その人はその中で孤立して行くのが普通であった。そして面白いことに、内地帰還が近づくと、また別の「頭の切替え」が行なわれた。》

山本が『「水＝通常性」の研究』の中で触れていたことも同じである。小松真一『虜人日記』に出てくる、《無条件降伏と聞いた瞬間、東京の自分の家作が無事かどうかの心配を口にした、ある参謀の話》について、山本は《“ぬいぐるみ”をとれば、彼の通常性的関心は、家作からの家賃と自分の恩給による平穏な生活だけなのである》と述べたが、この“ぬいぐるみ”をぬぐことが「アタマの切替え」であることはいままでのない。この「アタマの切替え」は欧米人も呆れてみせるほど、日本兵捕虜の中に日常頻繁にみられた。捕虜になることによって状況が一変したのだから、拷問されるどころか、待遇や食事の面でのアメリカ側の厚意に報いるために、重要な軍事情報をペラペラしゃべり出すかたちで、「アタマの切替え」がスムーズに行われた。「アタマの切替え」は下級兵士のみならず、高級将校捕虜の場合でも積極的に協力した点では、全く同じであった。

もちろん、敗戦時に大本営の元高級参謀がマッカーサーの諜報機関に協力するなど、「アタマの切替え」は敗戦後の全ての日本人に訪れた。「自分は変わった、今日から民主主義者だ」とか、「われわれには歴史がない、われわれの歴史は今日から新しくはじまる」とか思い込むようになるのは、まさしく「アタマの切替え」にほかならなかった。なるほど今日から自分が「民主主義者」として生きることになれば、「歴史は今日から新しくはじまる」のであって、生まれ変わる前の自分の歴史はなかったこととされてしまう。したがって、「アタマの切替え」によって自分の過去が切り捨てられ、不問にされるなら、昨日までの連隊長といえども、打って変って《物わかりのよい好々爺となり、にこにこと人びとに対応してくれる》ように豹変できるのである。

このような敗戦時のエピソードに接すると、吉本隆明が『思想的な不毛の子』（『模写と鏡』所収）で、次のように書いていたのを想起せずにはいられない。

《わたしは、敗戦のとき、動員先からかえってくる列車のなかで、毛布や食糧を山のように背負いこんで復員してくる兵士たちと一緒にあったときの気持を、いまでも忘れない。いったい、この兵士たちは何だろう？ どういう心事でいるのだろうか？ この兵士たちは、天皇の命令一下、米軍にたいする抵抗もやめて武装を解除し、また、みずからの支配者にたいして銃をむけることもせず、嬉々として（？）食糧や衣料を山分けして故郷にかえってゆくのは何故だろう？ そういうわたしにしても、動員先から虚脱して東京へかえってゆくのは何故だろう？ 日本人というのはいったい何という人種なんだろう。》

そして、《兵士たちをさげすむことは、自分をさげすむことであった。知識人・文学者の豹変ぶりを嗤うことは、みずからが模倣した思想を嗤うことであった。どのように考えてもこの関係は循環して抜け道がなかった。このつきおとされた汚辱感のなかで、戦後が始まった。》と続くが、吉本が目撃した復員兵たちの光景はもちろん、「アタマの切替え」によってもたらされた一幕にほかならなかった。60年安保闘争直後の昭和36年12月頃に書かれたこの一文は、《日本人というのはいったい何という人種なんだろう》と、「アタマの切替え」が日本人全体にまで広がった光景をみつめていたが、やがて吉本はこの復員兵たちの行動のなかに、「すべてはおためごかしではないか」という、国家権力者や指導者に対する大衆の根深い不信を読み取って、「大衆の原像」という思想的な概念を導き出していった。しかし、その概念の有効性が持続しえなかったのは、「アタマの切替え」は大衆のみならず、指導者を含む全日本人に到来していたからであり、したがって、「大衆の原像」ではなく、「日本人の原像」としての思想的概念を提出する必要があったのではないかと考えられる。